群教セ	F09 － 01
	平16.224集

「ほっとルーム」（適応教室、相談室）からの教室復帰を目指して

── チーム援助を通して ──

特別研修員　須田　佳明　　（榛名町立榛名中学校）

《研究の概要》

本研究は、「ほっとルーム」（適応教室、相談室）に登校する生徒に対して、かかわりのある教職員で援助チームを作り、情報を共有しながら連携し、それぞれの持ち場から計画的に個々の生徒にきめ細かく対応することで「ほっとルーム」に登校する生徒の教室復帰を図ることを目標とした実践である。「ほっとルーム」に登校する生徒が心を開いた教職員を中心にして援助することで、生徒の不登校・不登校傾向の改善が図れた。

【キーワード：　教育相談　　チーム援助　　ほっとルーム　　不登校　　不登校傾向　】

Ⅰ　主題設定の理由

10 年ほど前、本校では多くの問題行動が起こり、教職員はその沈静化に多くの時間を割いていた。教職員の努力が実り、現在は落ち着いた雰囲気の中で日々の学校生活が送られている。しかし、学校が落ち着くにつれて不登校の生徒が増え新たな問題となってきた。ここ数年は多い学年で 10 名以上、少ない学年でも５名ほどの不登校・不登校傾向の生徒を抱えている。クラスによっては常時３～４名の不登校・不登校傾向の生徒がおり、担任は大きな精神的な負担を抱えている。不登校・不登校傾向の原因としてはいくつかあてはまるものがあるが、非行傾向のものが少なく、心因的なもの、対人関係によるものが多い。特に本校は町内８小学校から生徒が集まり、新たな大きな集団となる。小学校は単学級が多く、お互いを理解し合っていた小集団の関係から､知らない者が多い大集団の中に入るため､対人関係がうまく構築できないで、登校を渋る者が出たり、不登校になってしまう者もいる。

本校には、不登校・不登校傾向の生徒のために、適応教室、相談室の２種類の部屋があり、隣り合って設置されている。今回この２種類の部屋を「ほっとルーム」とした。本校には不登校・不登校傾向生徒への対応として、教育相談員、生徒支援特配教員、町費生徒指導嘱託員、スクールカウンセラーがいる。教育相談員は相談室を運営している。本校で最も重い不登校・不登校傾向の生徒を担当しているのが教育相談員で、それらの生徒が登校後活動するのが相談室である。生徒支援特配教員は、適応教室を運営している。適応教室では、特定の教科によっては授業に出席できたり、行事の時にはクラスに入れる生徒や、登校できるが教室には入れない者を指導している。そして、一般の教室と同じように、各時間ごとに決められた授業者によって授業が行われている。授業内容は補習的なもので、学年が入り交じっている生徒に個別に対応している。町費生徒指導嘱託員はふだん保健室にいて、保健室登校の生徒や、悩みからくる体調不調を訴える生徒、悩みを相談にくる生徒の対応を養護教諭と協力して行っている。スクールカウンセラーは、木曜日に勤務し、不登校・不登校傾向の生徒本人や保護者とのカウンセリングを行ったり、家庭訪問をしてカウンセリングをしたりしている。また、不登校・不登校傾向の生徒を抱える教員とも面談を行っている。これらの活動を生徒支援特配教員が中心と

なり、教育相談員、町費生徒指導嘱託員、スクールカウンセラーと連絡を密にし、適応教室、相談室の２種類の「ほっとルーム」を運営している。

このように本校の「ほっとルーム」は人的にも場所的にも恵まれた状態で運営されているが、「ほっとルーム」にかかわる者だけで不登校や不登校傾向の生徒に対応できてしまうため、担任が生徒とあまりかかわらなくなってしまい、「ほっとルーム」には登校するようになるが、教室には入れない生徒が増えてしまった。担当者から職員室で報告を受けるだけで「ほっとルーム」になかなか顔を出さない担任が出てくるようになると、「ほっとルーム」と教室の距離が遠くなり、級友との距離も出てしまい、教室復帰がなかなか難しいものとなってしまう。そこで、「ほっとルーム」関係職員と担任や部活動の顧問などでチームを作り、不登校・不登校傾向の生徒一人一人に対して計画的に援助を行い、「ほっとルーム」関係職員と担任との不登校・不登校傾向の生徒への対応の差をなくしていくことで「ほっとルーム」に登校する生徒が早期に教室復帰を図れるようになるであろうと考え、主題を設定した。

II　研究のねらい

「ほっとルーム」に関係する職員でチームを作り、不登校・不登校傾向の生徒に対して個々に対応を協議し、計画的に支援・援助をしていくことで、教室への早期復帰を図ることをねらいとする。

III　研究の見通し

不登校・不登校傾向の生徒に登校を働きかけたり、「ほっとルーム」から教室へ復帰させるには、担任など個人の力ではなかなか難しいものがある。そこで、不登校・不登校傾向の生徒が心を開いている教職員を中心にチームを組み、生徒個々に対しての話合いを持ったり、情報交換をしながら生徒に多方面から迫ることができれば不登校・不登校傾向が改善したり、「ほっとルーム」から早期に教室復帰ができるようになるであろう。

IV　研究の実践と結果、考察

事例Ⅰ　　Ａ男

小学生から不登校傾向で欠席が多く・・・　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　・・・簡単な意思表示をするだけであった。

◎　スクールカウンセラー（臨床心理士）のカウンセリングでは（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）ということであった。

○　教育相談員、担任、生徒支援特配教員、スクールカウンセラーでチームを組む

〔役割〕

教育相談員　・Ａ男と接する時間が一番多いのでチームの中心となる。
・相談室でのＡ男の様子を担任に報告する。
・保護者への連絡や相談をする。

担　任　・教育相談員からの報告を受け、クラスで生徒にＡ男が教室へ入れるよう働きかけをする。

・Ａ男（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照)、保護者との面談、家庭訪問をする。

生徒支援　　・教育相談員が不在の時にＡ男への対応をする。
特配教員・保護者やＡ男のカウンセラーとのカウンセリングの設定をする。
・チーム会議の設定をする。

スクール　　・保護者やＡ男に対するカウンセリングを実施する。
カウンセラー・教育相談員や担任、生徒支援特配教員に対してアドバイスをする。

コーディネーター（研究者）
教育相談員や担任と連絡を密に取り、担任に対し、家庭とのかかわり方やＡ男に対してのかかわり方のアドバイスをする。

教育相談員から相談室でのＡ男の様子が担任に報告され、短いスパンでの対応をどうしていくかの確認をしながらＡ男に接していくこと、生徒を使い教室での授業や話合いに参加を促していくことの２点を指導の柱とした。さらに、教室復帰及び　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　連絡を密にしＡ男及び保護者を支援していく。

（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）

考察
この事例では、教育相談員の「できることをやろう、今までできていたことをやってみよう」という毎日の根気強い働きかけ、担任からクラスメイトへ「教室へ入れないＡ男の気持ちになって個人で何かできることがあるのではないか、それをやってみよう」という働きかけ、そしてクラスメイトの積極的な行動がかたくなに教室への入室を拒むＡ男の気持ちに変化をもたらしたのではないかと考えられる。毎日のように繰り返される教育相談員と担任との情報交換、打ち合わせも有効であったと思われる。

事例Ⅱ　　Ｂ子
小学校から不登校。・・・　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　・・・教室にはなかなか入れない。

○　生徒支援特配教員、町費生徒指導嘱託員、養護教諭、担任でチームを組む
〔役割〕
生徒支援　　・Ｂ子と接する時間が一番多いのでチームの中心となる。
特配教員・適応教室でのＢ子の様子を生徒指導嘱託員、養護教諭、担任に報告をする。
・保護者への連絡や相談、家庭訪問をする。

生徒指導　　・保健室へ来室したＢ子の対応を養護教諭と協力して行う。
嘱託員・Ｂ子の相談に対応し、生活面の指導をする。
・保護者に対してＢ子の相談に乗ったり、生活面の指導を促す。

養護教諭　　・保健室へ来室したＢ子の対応をする。
　　・Ｂ子の家庭での生活面と衛生面の指導をする。

担　任　　・生徒支援特配教員、生徒指導嘱託員、養護教諭からの報告を受け、クラスで生徒にＢ子が教室での活動に参加できるよう働きかけをする。
　　・Ｂ子の　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　保護者との面談をする。

コーディネーター（研究者）
生徒支援特配教員と連絡を密に取り、学年としてどのように B 子を指導していくかを学年会で話し合う。担任と B 子との会話の時間を持つよう担任に対して働きかける。B 子に対し行事などの機会にチャンス相談をする。

生徒支援特配教員が中心となり、登校を働きかける。登校後は適応教室での授業を受けさせ、体調不良を訴えても帰さないで頑張らせるようにさせていくことを指導の柱とし、朝からの登校と教室への早期復帰を支援する。また、　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　努力を続けられるよう家庭との連絡を密に取り、生活習慣の確立にも協力を呼びかけていく。

（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）

考察
本事例は、生徒支援特配教員及び町費生徒指導嘱託員、養護教諭がＢ子の登校時の様子や体調などの連絡を密に取り合い、毎朝家庭に電話連絡をして登校を促し、登校したら頑張って勉強するという基本的な習慣が大切だということを B 子自身に訴えてきたこと、（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）Ｂ子自身にもやる気が出てきたこと、担任の教室での働きかけでクラスメイトが積極的に授業に誘ったことが、一部の授業ではあるにせよ、Ｂ子が教室へ戻れるきっかけとなったのではないかと思われる。

事例Ⅲ　　Ｃ男
小学校の・・・　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　・・・生活を送っている。

○　生徒支援特配教員、町費生徒指導嘱託員、部活動顧問、担任でチームを組む
〔役割〕
生徒支援　　・Ｃ男と接する時間が一番多いのでチームの中心となる。
　特配教員・適応教室での様子を生徒指導嘱託員、部活動顧問、担任に報告する。
　　・Ｃ男の生活習慣の改善に向けての働きかけをする。
　　・保護者への連絡や相談、家庭訪問をする。

生徒指導　　・保健室に来室したＣ男に対応する。
　嘱託員・Ｃ男の生活習慣改善に向け、生徒支援特配教員と協力して働きかけをする。
　　・家庭訪問をして保護者の相談に乗ったり、Ｃ男の登校指導をする。

部活動顧問　・Ｃ男の部活動への参加を直接、または部員を介して働きかける。また、部活動での様子を生徒支援特配教員、生徒指導嘱託員、担任に報告する。

担　任　　・生徒支援特配教員、生徒指導嘱託員、部活動顧問からの報告を受け、クラスで生徒にＣ男が教室での授業に参加できるように働きかけをする。
・保護者との面談、家庭訪問をする。

コーディネーター（研究者）
（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　授業前にはほかの生徒に声かけを依頼する。また、部活動の時間にチャンス相談をしたり、活動の様子を顧問や生徒指導嘱託員、生徒支援特配教員に報告し、以後の対応について話合いを持つ。

生徒指導特配教員が中心になり、登校を働きかける。登校後は適応教室で授業を受けさせ、保健室で過ごすことがないようにさせる。部活動には参加していることが多いので部活動を頑張らせ、自信を持たせていくことを指導の柱とする。

（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）

考察
長期・・・　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　・・・生徒支援特配教員、町費生徒指導嘱託員のわがままを許さない姿勢と、本人の辛さを理解してやる温かい声かけ、部活動での活躍がＣ男に変化をもたらしたのではないかと思われる。まだまだ、教室への完全復帰は時間がかかると思われるが、生活面が徐々に安定してきているので、今後改善が期待できる。

事例Ⅳ　　Ｄ子
１年生の後半から・・・　（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　・・・本人は学校に登校したがっている様子がうかがえる。

○　生徒支援特配教員、スクールカウンセラー、教育相談員、担任でチームを組む
〔役割〕
生徒支援　　・Ｄ子と接する時間が一番多いのでチームの中心となる。
特配教員・適応教室でのＤ子の様子を教育相談員、担任に報告する。
・保護者への連絡や相談をする。

スクール　　・保護者やＤ子に対するカウンセリングを実施する。
カウンセラー・生徒支援特配教員、教育相談員、担任に対してアドバイスをする。

教育相談員　・相談室でのＤ子の様子を生徒支援特配教員、担任に報告する。

担　任　　・生徒支援特配教員、スクールカウンセラー、教育相談員からの報告を受け、クラスで生徒にＤ子が教室での授業に参加できるように働きかけをする。
・保護者との面談、家庭訪問をする。

コーディネーター（研究者）
生徒支援特配教員と連絡を密に取り、担任に対してＤ子との接し方についてアドバイスをする。

生徒支援特配教員を中心に登校を働きかける。短時間でも登校できるようにすることを柱とし、チーム内の連絡を密に取りながらＤ子に働きかけていく。

（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）

考察

本事例は、生徒支援特配教員とスクールカウンセラーが情報交換を密に行い、教育相談員がサポートする形を取った。Ｄ子自身の学校へ来たいという気持ちと、あせらず徐々に学校にいられる時間を延ばしていこうというチームの働きかけがうまくかみ合い、短期間のうちに、相談室でのプリント学習から適応教室で授業を受けられるようになった。そして一日適応教室で明るい表情で授業を受けられるようになるまでにＤ子の状態が好転したものと思われる。

Ⅴ　まとめと今後の課題

今年度初めに15名の不登校・不登校傾向の生徒がおり、その中で「ほっとルーム」に通っていたものが１名しかおらず、増える傾向にある不登校・不登校傾向の生徒に対しての対応は、学校としての大きな問題となっていた。今年度から配置されたスクールカウンセラーと今まで「ほっとルーム」を担当していた職員が協力し、個々にきめ細かく対応することで不登校・不登校傾向の生徒が「ほっとルーム」に登校するようになった。不登校傾向の生徒に対して、その生徒と意思の疎通のできる職員を中心にチームを作ったことで、生徒の気持ちを引き出し、その気持ちに対してどのように対応していくかの話合いが、チーム内で時間を見つけて頻繁に実施できたこと、スクールカウンセラーとの情報交換がスムーズにいき、専門的な助言を受けられたこと、「ほっとルーム」として適応教室、相談室の役割分担を弾力的にしたことなどが不登校・不登校傾向の生徒の登校につながったのではないかと思われる。

事例であげたように、Ａ男は級友との接触を避けていたものが教室で給食を食べたり、休み時間に校庭で遊べるようになった。B子は欠席や遅刻が多かったのが毎日のように登校でき、（中略　詳細は群馬県総合教育センター図書室収蔵研究報告書参照）　頑張っている。C男は「ほっとルーム」に入れなかったものが「ほっとルーム」で学習ができるようになり、部活動に積極的に取り組めるようになった。D子は短期間で完全な不登校から「ほっとルーム」に登校し明るい表情で過ごせるようになった。また、事例ではあげていないがほかにも大きな変容を示している生徒がいる。これは、チームが有効に機能した結果であると思われる。

学校全体の取組として、不登校や不登校傾向の生徒の様子を、毎週開かれる生徒指導委員会で報告し、全職員に文書で配布し朝会で報告することで、どの学年のどの生徒が現在登校していないか、登校を渋っているのかが把握できるようになり、登校した不登校傾向の生徒に声をかける職員が増えた。また、生徒指導全体会議でスクールカウンセラーに「不登校傾向を持つ生徒の事例とその対応について」という題で講話をしてもらったことで、不登校・不登校傾向の生徒やその親への対応などについて教職員の意識を高めることができた。12月末現在で、不登校・不登校傾向の生徒は25名に増えてしまったが、５名は登校すれば教室で過ごし、10名が「ほっとルーム」に登校している。生徒支援特配教員の働きかけで、カウンセリングを受ける家庭が増え、家庭との協力も取りやすくなった。しかし、学年により不登校・不登校傾向の

生徒に偏りがあり、多い学年はその対応が大変となっているのが本校の大きな課題である。
　今後も不登校や不登校傾向の生徒の情報交換を頻繁に行い、個々の生徒に合わせてきめ細かく対応していくことを続け、本校の課題解決に向けて努力していく必要性を強く感じる。